

吉川史料館たより

第69号
2019年
(平成31年)
1月2日
水曜日

展示品紹介

このたびは江月宗玩の偈を紹介し
ます。

江月宗玩は堺の豪商津田宗及の二男として生まれ、大徳寺の第一五六世となりました。その後、福岡藩主の黒田長政が父・孝高を弔うために建立した大徳寺龍光院の住持となりました。この龍光院には、吉川広家の墓も建立されています。

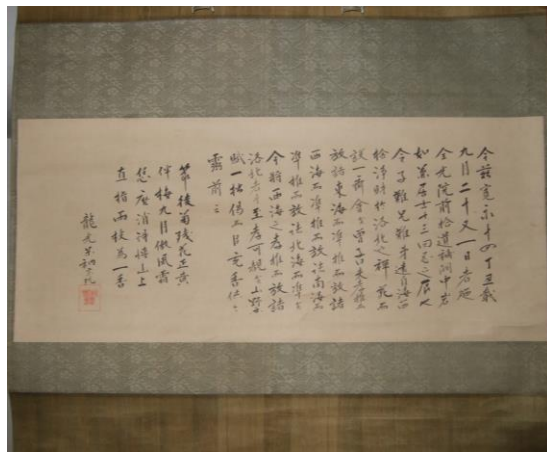
寛永十四年(二六三六)、広家の十三回忌にあたり、二人の息子・広正と就頼が龍光院を訪れ、父の法要を行い、宗玩より「偈」を贈られました。偈とは漢詩のことです。

内容は次の通りです。
今茲寛永十四年十丑載九月二十又一日者
廻全光院前拾遺補闕中岩如兼居士十三
三回忌之辰也令子難兄難弟遠自海西捨
淨財於洛北之禪苑而設一齋會矣曾子曰
夫孝推而放諸東海而準推而放諸西海而
準推而放諸南海而準推而放諸北海而準
矣今將西海之孝推而放諸洛北者乎至孝
可觀矣山野亦賦一拙偈而以充香供々靈
前云

節後菊残花正黃
伴梅九月傲風霜

慙麼消得傳山上
直指兩枝為一香

龍光法呆衲宗玩(印)



これよりのち、広家十七回忌の際にも宗玩は偈を吉川家に送っています。

さて、広家と宗玩の関係は、天正十六年(一五八八)ごろからとされます。この年、豊臣秀吉は九州を平定し、その功績のあった毛利輝元、小早川隆景、吉川広家を京都に招いて歓待しました。

発行所 吉川史料館

山口県岩国市横山二丁目七一三
郵便番号 七四一-〇〇八一
電話番号 (〇八二七) 一四一-一〇一〇

広家は天正十五年、兄元長の急死により家督を継ぎ、この上洛は吉川家の当主として初めての社交の場でした。

一か月以上の長き上洛の間、天皇への拝謁、聚楽第での秀吉の和歌会への参加、宗玩の父・津田宗及の茶湯に招かれるなどしました。京都の公家、秀吉に従う大名たち、そして連歌師や茶人といった文化人とも交流する機会を得たのです。そして、寺社への参詣もあり、そのなかに大徳寺にも参詣しています。このことから、宗玩と広家の関係が築かれたと考えられるわけです。

広家の死後、吉川広正が江月宗玩へ肖像画の贊を依頼しました。贊には、広家の活躍をはじめ、寺の檀那として長く支援をしていたことも記されています。これが二人の関係を示しています。

また、龍光院には、広家の墓以外に盆石「大残雪」があります。朱書きで「斯石自尼子伝吉川広家伝江月」とされているようです。

この盆石の存在を調べるために江戸時代の岩国藩士・静間勘兵衛と井上治平太は奔走し、なんとかつてを得て京都へ赴き、現物を実際に見て、描き写し、また粘土で模造しています。

図は次のとおりです。



寸法は、縦二十七センチ、横四十五・五センチ、高さ二十二センチでかなり大きいものです。

一度は確認したいと思いましたが、非公開の塔頭ですので、在任中にツテを得て拝見できたらと考えています。

(原田史子)